

デューイ「学校と社会」 第二章 学校と子供の生活 岩波新書 1957. 7. 25

まず旧教育における教育活動への批判(p45)に始まり、教育の重心を子どもに移し、学校を生活する場所ととらえよ(p45)との提言から始まる。理想的な家庭では、子どもは道徳的な素養や具体的な経験にもとづく文脈的な知識（場面や状況に即した知識）を獲得していく。我々はこれに倣い、学校を生活の場と位置づけ、子どもたちが活用可能な文脈的な知識を十分に身につけさせたいと、知識を構造化し、一般化させていく（つまり類推したり汎用したりすることができるようにする）ことが求められている。

では、学校を生活の場所ととらえたとき、どのように必要な知識を習得し必要な訓練を受けることができるのだろうか(p65)。デューイは、子どもの衝動を利用することを説いている(p65)。この衝動をデューイは①社会的本能—話したい、②構成的衝動—つくりたい、③探求の本能—やってみたい、試したい（子どもは抽象的な究明に対して本能はあまり持たず、①対話や②具体物を通じた探求をすることが多い）、④表現的衝動—表現したい、の4つに分類した。そもそも子どもはじっとものを聴く存在ではなく、様々な衝動や願望に駆られて生きている。衝動を満足させるためには、様々な障害に向き合い、材料を活用し、器用・忍耐・固執・敏活をもって解決に取り組むことが必要である。つまり興味に基づく生活が「必然的に訓練—力の整序—を内包し、かつ知識を獲得する機会となる」(p48)。我々はこの衝動をよく理解し、最初に自己の衝動を表現させ、それから批評や質問や暗示を通して、自分が何をしたのか、何をしなければならないのかという意識にまで導く(p51)ことで、主体的な学習を作り出すことができる。つまり、興味を刺激して引き出すだけでなく、「しっかりとつかまえ、前方にある、もっと大事な或るもののほうへと」(p58)指導することが必要なのである。このことが一方的な教授ではなく、子どもが主体的に、必要に迫られて学ぶことを可能にする(p60)。こうした学習においては知識だけでなく、注意力、解釈力、推理力、鋭敏な観察力、連続的な思考の力がやしなわれる(p60)。

衝動を創生するためには復誦が効果的である。復誦とは自由なコミュニケーション活動の一つで、経験と思考が交換され、批判され、誤った考えが訂正され、思考と探究の新たな道筋が発見される、一種の社交的交換所というべきものである(p61)。先の①は、自己の経験を他に語り、他の経験を自己のものとしようとする社会的欲求であった(p62)。この言葉による伝達が子どもを事実や力（現実）と接触させ、真実を学ばせることができる(p62)。本人の、身をもっての理解がしているときにはその子独自の適切な表現を見ることができる(p64)。そうやって表現されるものは思想と呼ぶにふさわしい。言いたいことがあるのと、言わなければならないのとでは、大きな違いがある。様々な材料や事実をもっている子どもは、それらについて語りたいのであり、しかも、その言語は、現実の事物によって統制され教えられるから、いっそう洗練され、充実させられる。

ここまで子供の活動の外部に現れたものについてのみ述べてきた。しかし現実の子どもは創造的な価値と観念の世界に生き(p67)、自分の世界の中で生きる存在である。ここで述べられてきた教育の在り方や歴史的・科学的教材（※教材の具体例は割愛している）は、子どもの想像力を開発する材料となる。結果、子どもの生活をゆたかにし、かつ整序するところの道具ともなり材料ともなる。(p68)なぜなら、目に見える外部的な動作や製作品の背後では心的態度の再調整が行われているのであり、視野が拡大され、事物に感入する力が養われているのであり、力の成長が自覚されているのであり、さらにまた、自己の識見および才能を自らすすんで世界と人類の利益に一致せしめてゆく能力が獲得されつつあるのである。(p68)このように、想像力が屈伸性において、範囲において、感入の度合において成長して、ついに個人々のいとなむ生活が自然の生活と社会の生活によって浸透されるにいたるような、そのような想像力の成長のことを教養というのである。(p69)